

和文讀本

稻垣千穎輯

卷二

30473
教科書文庫

3
810
51-1887
0130 449325

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

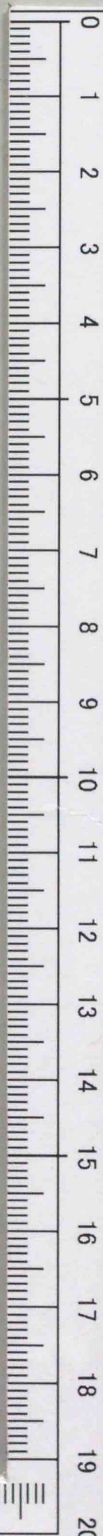
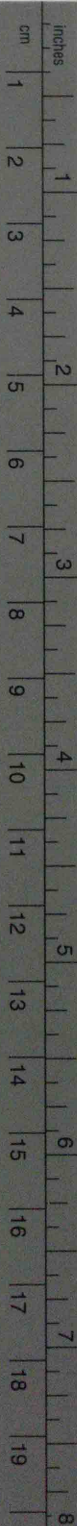


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



和文讀本卷二

本居宣長ハ三百年前ノ人ニシテ
係結等ノ文法ヲ見出スル

稻垣千穎 輯

地理

伊勢國

本居宣長

伊勢國ハかた國のうま^傍國と古語おもひひく

北のちをより南北はて^美すで西の方ハ山々つら

なりつゞきと^續もことゆ青垣をなせ東の方ハ

入海ふせいせの海といふこ^ウをありうくていづ

とも山と海との間廣く平原ありて北ハ桑名

広島大学図書

0130449325



山田ヨリダ

ひたつ、きのくま
(今ノ一續、ノト云
フト同じ)

サキノ件ノ

前件ノ意
即チ前ノシタ
リ前ニ書キタシ
ニ續キテハ

濃津

今ノ所謂津ナ

かくて

カヨウノシカイ
テアリテ猶而
ノ如シ

カト

いともしくナリ
即チ取モク

ナリ

可一もあらで

指程(富有ノ)

家トハ見エテモ

「家」ふみわろく

家ノ並ニ方ガ

「富キナリ」

より。南ハ山田まで。廿里あまりがほゞ山といふ

物部といふも越ゆることあくチひさつ連ひさきのくま

をらある。そ此間小廣き里々多りる中小山田安

濃津松坂桑名あど。殊小賑をしく大ある里を

り。大の京より江戸まで。な七國や國を經てぬ

く間小。あをかりの大里ハ。近江の大津と駿河の

府除とをホカハあきくを。有ることなり。あこの國々も

思ひゆるサキなる。件の里々よつぎて。四日市。白子

などよき邑あり。かくて此の國海の物山野此物

すべてとめり。かゞば。暑寒も他の國ふくくぶる

よきも甚し。あど。たゞ。さむさむと北の方へ

よる。あ。小次第小寒し。風ハよく吹く國あり。國

此賑をしくたことハ。大御神の宮に詣づる旅人

たゆることあく。殊小春秋のほゞハ。いとくもぎ

はくし。た事大く。天の下よな比びなり。土肥え

て稻いともよ穀たあ菜の物もなつ物も大く。皆

よ穀く。松坂ハ。殊よよき里小。里の廣き事

ハ。山田中つぎたむど。富る家あむく。江戸は店と

「まどけちや
乱撰ナドモフセ
ちハ無クモ
まヨク非ラズ之レ
熟語ナリ

「潮モサ、ゆゞ
其上潮モサス
コトナシ

「ソカガビヒヨ
田舎ヤナシ様
モナシ

「賑
ニギハシキニツ
レテトモフ喜
ナリ

「おさし
並ベテ見シテ
モ少しモナル
ナリ

いふ物をあましくおきく手代といふりのを多く
あはせく。あきなひせきをさあ。あるハ國もの
居て遊びなり。うをん^商ハさしもあはさうあは
いたく豊はおぶりと^世渡るすべと此の里町は
ゆかきと正しあはば家なをわろく。一ツこま一
尺二尺づゝ出入りて。ひよりあはせいあはせ
けあし。家居ハけいもいあはせかたせ。されど内
々のすすひもひとよ。水ハよた所とよあき所
とあはさく。むくくくく。川水もくあく。潮もさ

あは。船通をば山へを一里あはさう。海へハ半里あ
ま。諸國のたよりよ。ことよ京江戸大坂ハた
とよりよ。諸國の人北入り来る國あはばい何と
へも。便よし。人の心ハよくもあはせ。あぶりと
ま。あはと少し。人北かたあ。男も女もあはさびと
るあはとさう。あはさく。あはさく。女ハ。里の豊小賑な
し。あはさく。あはさく。あはさく。あはさく。京よあ
とあはさ事あ。人北物いひハ。尾張國より東北國
々ハたあ。あはさく。伊勢ハあはさく。あはさく。あはさく。

声ワヤ
登音正一か
かざぶち

晦ツモゴリ

月ゴモリノ言心

ツイタチ

ツキタチノ約言

詞

声ヲ並ベテ

ア言ハ味ヲ持

タムルヲシフ

はせど山城大和ありともハ何となく聲いよ一詞
もい中しき事多し一いをゆる吳服物小間物のた
ぐひハよき品を用ゐて山田津かともハこよを
く代物よしさむを商人の京より志いるも松
坂をこつとも物よく上々の品あり京のおき人常
は來通ふあり時々のちやと物もをり過さば諸
藝ハ所びるあをさくハよきあともあつて
ろくの細工いと上手あり神社佛閣もへとも
はくしきと此の國ハ他國比人あなく入り

む國ある故よよらぬ物もあなく盗なども多
し松坂ハ魚類野菜などすべとゆらありされ
と魚もハ鯉鮒少く野菜もハ久わゐる蓮根など少
し松坂のあぬあともハ町筋の正しからんしと
けあきと船此通をぬとあり

紀の國比名所ども

本居宣長

待乳山ハ大和國の堺ゆと紀の國比伊都郡なり
角田川ハもつち川比あともあるべし此の川みあ

此文おべて紀
記万葉集の古
書に見えたる
名を本わして
のしむるをバ
其心しをみむ
バ文意のさと
りたき所も
あり

西四町おまり。南北八町をわたり、島の多し。其の島
 北三町はより西よ。おさ島ありて、沖島といふ。東
 西五町は、南北六町をわたりあり。北に島を浦
 のはよりまるといふ。をわたり北山に在田郡山田莊
 といふ村といふ所あり。その村を伊都郡
 北塚といふ。山のおさあり。白崎。日高郡衣奈莊衣
 奈浦の東南のさ。衣奈八幡といふあり。其の社
 北縁起。白崎といふことみえり。三徳の岩屋

天皇の御足
 正徳命ハ侍也

伊都郡
 北塚
 衣奈

八。同郡三尾村の二十五町をよりひびりみあま
 の海べよあり。岩屋北中。石の観音の像あり。熊
 野道のうち。日高川鹽屋のあよりより西の海べ
 よ。長き松原あり。和田北松原といふ。この岩屋
 ハ。其の西のさ。おさ。野島。阿古根浦ハ。同郡志不
 屋浦の南よ。野島里あり。その海べをおこぬ。北浦
 といひく。貝の多くよりく集る所あり。きりぬ山
 ハ。同郡熊野道北りみべふて。切目坂。切目浦。切目
 村あり。山ハ。村より一里をより東北あり。村の北

あこぬ日ハ古
 くより書見
 ねりふりひあ
 り

ふ切目王子社もあり。以てしるハ同郡あり。切目
ををぎく。次子岩代あり。岩代西岩代東岩代とて。村あ
ある。岩代王子社海べあり。千里濱ハ岩代の南
の邊より。みあべもとの間一里半をりの所を
いふ。昔元弘元年七月三日。大地震ありて。紀の國千
里濱二十よ町ぐやど。忽陸とあせり。太平記
めあるせり。三名部ハ岩代の南あり。三名部村。み
なべ浦あり。其の十町をり海中に島あり。これを
鹿島あり。さく三名部の南ハ塚浦といふありて。

郡の堺あり。そこまごハ日高郡。そをよりあある
ハ牟婁郡あり。磯間浦ハ左あべの王宿村の南神
子濱つごきよあり。神島ハその一里をり海中
にあり。まるといへり。あらの濱ハ湯崎
白山
釜山と瀬戸との間あり。里人ハ白濱といへ
る。此の濱ハ真砂。遠く見せハ雪のごと。神藏山
ハ新宮より二町をり東南にあり。社の説ハ天
照大神と高倉下と。二神を祭るといへり。石のは
を六間をりのりて。上ハ堂ありて。地藏の像

釜山ハ
ヤマツリヤマ
真砂ハマサ
ト訓

高倉下命の御
霊の神剣をえ
て神武天皇の
御らまはしこ
史よとえり

をおけりといへり。そをを神倉権現といひ。其
の外は社ハあり。彼の高倉下命の神剣を得たり
とところハ、あくなりとぞ。熊野村ハ、新宮よ。上熊
野中熊野下熊野とぞ。三村あり。三輪ヶ崎ハ、新宮
より那智へゆく道の海へあり。新宮よ。一里半
むよりありて。けしきよ。た所あり。佐野ハ、佐野村
といふありて。みくら崎のつらきなり。佐野岡を
村より七八町北ハあり。玉浦ハ、那智山の下ある
粉白浦といふ所よ。十町はくりあり。みあるよ

あり。をあることとまといへるハ、玉の浦の南北海
中ふちりく離小岩あり。それをいへるなるべし。
其の外ハ、島をあり。熊野御崎ハ、那智山北下濱
宮よりゆく海への道を。大邊地といふ。その間ハ
上野村といふあり。海中へ長くつさいでた。崎
ありて。志布の御崎とも。鹽崎浦ともいへり。みくら前
の神社あり。少彦名命を祭る。此の所の海ハ、のち
り志布くづる潮とて。年を重ねて。片潮ハ流れて。
志布の満干ハ拘らば。いと早く流る。海を渡

「よこがたまりて
横証ナリ」

「おつり川なり
流はナリ」

る船人のいたく怖るゝ所あり。有馬村ハ新宮よ
り北の方へ伊勢甚の方へ五里をうりゆきて森本
といふ所の二十町をうり南にあり。そこは産田
神社。おの花の窟あり。里人よこなまりて大般若
窟といふ。此の窟の山高サ二十四五間訛めぐり三町
をうりある。此の窟ハ伊邪那美尊を葬奉る所
といふを。又或説ハいざなとの尊を葬奉れる
所ハ産田神社にて。花の窟ハ火神なりといへ
る。楢ヶ崎ハ木木莊二木島といふ所より一里を

うり海中にあり。昔ハ此の所伊勢と紀の國の堺
あり。と里人いへり。錦の浦ハ長島莊長島村の
一里をうりひびしあり。此は地昔ハ志摩國なり
しとぞ。上の件磯間浦よりこたのこハ皆むらの郡
なり」

動植

狗大ある蛇を昨殺た話

今昔物語

源隆國卿

目一ハッレテ

今ハ昔陸奥國ニ住ミける賤シ老者あり。家ニ數
の犬を飼ひて常ニ具して深山ミヤマニ入りて猪鹿を
とりて食する事を晝夜明暮の業とし。狗も主ガ山へ
いさバよろあびくあといさふたちてゆき猪鹿
を昨殺を役とす。かくする事を世の人狗山と
いふあるべし。かくる時ハ食物ををちて二三日
も山ニ止ること多し。或時此男例の如く犬と
もを具して山ノ入りて其の夜ハ大なる木のうら
ちに入るを傍ニ弓をびと太刀をおき前ニ火を

隙

洞

ふん
ふんハ指ト
同じ係アリ

たき。狗どもハわづりハ皆ゆたりけり。然るニ
夜ふけく狗どもよくねいりて年ふるまぐ
ききかしく老狗あり。俄ニ起來りて主ニ向
ひておびたぐ。ほえをきか。主何をおゆるお
やハ異しく思ひき見ゆぐ。主ニ向ひてをどりか
し。狗ハ猶吼えやまぶしく。主ニ向ひてをどりか
りてをきく。主驚きてほゆあき物もあ
きよかくあるハ。獸ハ主をしくぬをのあせバ人
もな老山中おき我をくく思ふな。ん切

殺してすてむやとて、太刀を抜きて威しむるも、少しも退らざり。いやましむほえければ、かゝる狭き穴にて、くちひつらきすば、あしむらんと思ひて、うつらより外へ躍出でけり。其の時、おれ狗うづほの上の方、躍りあがり、物おくひつきぬ。主さてハ我をくらちんとき、ほえたるおれら、げりりりと見ると、あは、何と、いふぞ、あびさしを物狗と共に落ちたり。狗なをも放たせ、くひつき居たり。主見るよ、長二丈餘ある蛇あり。主刀

犬蛇ハ和訓
ウツバミ又神
付ハ卷ニハヲロ
ト註シ

をぬきて、蛇を切殺して、狗を引離しけり。こまは、おの木の上方、大蛇の身をけむを、あつて、そのうつらより、ふりたるを、蛇の吞まむとてあり。我見て、狗ハほえけるなり。狗あくして、おの蛇は、まうを、あつた、その、おんや、トスカリセシ、口が、爲るを、あつた、びあ、お忠ある狗ありと、く、具して、家へ歸りしと、あん、語り傳へらるる也。

猿の鳥を使ふこと 古今著聞集

橘 成 季

文覺上人高雄興隆のころ見まをりけるや清瀧
川の上小大ある猿兩三足ありけるが一の猿岩
の上ゆあふのきふしく動うぞ二足はたあのか
て居るをけり^仰上人あやしく思ひてうくきて見
けむバ鳥一兩飛び来てあのかたは猿のかとを
らよおたりあむくばけりあむく猿のあをを
さけり猿あむくくこのだ死ゆつるさまあを
むバ鳥次第まつきく上よのけりて眼をくら
らんしくける時猿鳥の足をとりてあきあをを

ありりその時残の猿二足出来て長きうづら
持ちて鳥は足おけてけり鳥とびさるとをを
どもうなむはきてやがて川よありき鳥をば水
をなげ入きてうづらの^端をとりて一足はあ
りいま二足を川上より魚を^端をとりて人の鶉つ
うひくろを見て魚をとんとしくなるよ^{ハカシ}
ぎもぞ思ひよりたりける鳥ハ水もあげいそくれ
せどもその益あきて死あけむを猿どもはう
あをて山へ入りあり^{コク}ゆきたりし事まの

あさり見たる下とて、まをち上人のうらけ
る事あり」

鴨の類くぎぐ

本居宣長

田中道磨が語りける鴨ハは大小の四くさあり。
第一大なるをモまがもとりのひ次モ大あるをモひと
りとのひ次をあぢといひモをたの
べといふ皆同ト鴨モたの形の大小モよ
りて名のかたありあぢモべなど万葉の歌

あよあり又あいさとりふハくさあをこを鴨の
くぐひなものをひさくあともあり万葉七の歌は
あきさとあるハ此の物ありといへり」

牛馬 犬 徒然草

ト部兼好

人ヲのつく牛をを角をきり人ヲくふ馬をバ耳をきり
て其のあらしとひあらしとつけぎて人をやぶ
らせぬをぬカのとごあり人ヲくふ犬をバや
あふべのとどは是皆科あり律のいましあり」

魔牧律ハ凡馬
牛及有弱能湯
咬人而記諸者
繫不如法者皆
四十跪小畜産
敵ハ者皆前角
踏ハ者皆足踏
以者截而耳

御溝ハ禁中の
流あり呉竹の
臺ハ仁壽殿の
西あり

あつきの下り
呉竹の伏見
を出て、云云
トあり、ヤウ、
竹ハ伏見、枕
詞あり、吳竹
の竹節ハ伏見
をこえて、云云
あり

久世竹 加老竹 徒然草

部兼好

呉竹ハ葉ほそく、淡竹加老竹ハ葉むろし、苦竹御溝ニ近き

ハ加老竹ニ壽殿の方より植ゑらるるをい

く「世竹あり」もあはるる大書仲武大書仲武

むろの木 本居宣長

田中道賢がいへり、ハ、下万葉集の歌よみたる

むろの木といふものハ、今もいづこにも多くあ

る物あり、美濃の不破郡多藝郡あどおて、ひむろ
とも、ひむろ杉ともいひ、伊勢の員辨郡桑名郡あ
らり、小も、たちむろともいひ、尾張の羽栗
郡あ、ねむむろともいひ、ほの木ともいひ、むろともい
へり、まべく山は多き木あて、地ふちふと、高くた
つと、二種あり、ちふ方ハ大木ハあきを、立て
るもの、ふを大あるも多し、柏子ヒキクシといふ木は似て、
又杉子を似たり、二種ともいふ、實あやくなるもの
あり、といへり也

田中道一 鎌倉
本名六日長
時代人

三河管の歌
万葉集に見え
る

あるすげといふ草 とぬまこの木

本居宣長

世よかやつり草といふ草の小さやうある草の
田よおひて田夫のいづくいとも草あり美濃國
あてこまをあるよといふ三河國あそいもあるす
げといふよありまろこ管と歌よよある物よ
もあとりくと田中道管いへり
とぬりこの木といふ木木の色いと白く葉ハ榎
の葉小似て大木もある物あり實ハ人ひのくの

如き形ふて上の方ハ葉のやうよひらありくさ
んの木美濃國飯木村は多くありてあづきむら
まハなすと同ト人のいへり飯木村ハこの人此故
郷あり多藝郡なり

家ハあまほしき水草 徒然草

ト部兼好

家ハありさき木ハ松櫻松ハ五葉もよし花ハひ
とへなるよハ八重櫻ハ奈良の都よのこありけ
るを此の頃ぞ世ハあやくあり侍るある吉野の

八重櫻ハ聖武
の御世ハ奈良
ありあらしむ
よ物よあり

引互がともし
あまふん
植エズレテ可
ナラント云フ也

コナクなく
ヨウガ子ジケタル
ガ如キ有様ジヤ

有様が様又
おさえをきて
枝ましほみ
つきよをさ

同りつをた
珍ラシク又世
ヨクアラザル
モノ

つまかぬん
とらふちを
物ふま
フルクナルト云フ
ナリ物ハ添ハ
字ナリ

花左近のさくらも皆むとくみとこそあせハ重櫻
ハ異様の花のありいととあさくねおけらう
あせともありあんな遅櫻よとすすきすし虫のつき
ふるもむづのし梅ハ白きうも紅梅ひとへなる
がとく咲きたるも重りたる紅梅のおほひめで
さきも皆をのしおそき梅ハ櫻よさ知あひくお
がえかともまけかさむと枝よあねもつきたる心
うしむとへあるぐもづさきをちりたるハ心と
くをのしとて京極入道中納言ハなるひとく梅

をあん軒ちうくう名とせりたる京極の屋北
南むきよ今も二本侍るめり柳まるとのし卯月
むのりの若うんでまべと萬の花紅葉もまさ
まそめでたきりのあり橘桂いげせも木ハ物ふ
り大あるよ草ハ山吹藤のきつむさなでしこ
池よは蓮秋の草ををぎまきまきまきあうはを
みあべふちむのまあをふ日せもあう新宣を
んだう菊黄菊もつふつむ朝顔いづせもいと高
うとせさやあある垣よあげうとぬよこの

可受又と可
笑トのニツ有
ルナリ之、との
シニハ種々ノ
説アリテ輕キ
と云キタシハ
ツアナリキ
キヲ用井タルハ
可受又ナリト

今アハズでか
ふぢぢぢぢぢ
定セズ判ナリ
説アリテ之ヲ
ハズナリト何
て種ノ内ニ

まよふふアリ秋
秋ハ秋ハ秋ハ
野有 天ニ神の
テテ 方ふさぐれ
野有 他はひひ
テテ 方ふさぐれ
野有 他はひひ
テテ 方ふさぐれ
野有 他はひひ

わり世もよきなるもの。あらめきたる名のきく
あく。花も見あせぬあどいとなるの。かき
大か。何もめぐりく。何のうごたその。よの
らぬ人比えて興ざるものなり。さ申うのその。あ
くてありあん」
萩ノ種まきまつりきまつ

高倉院、天皇女童子御衣賜をせし御事
平家物語
高倉院、天皇女童子御衣賜をせし御事
平家物語

安元七年のころをひ。御方たへの行幸のあり
驚を程おもあり。くむ。御ねざめがあら
て。つやく。御寝もなごり。況んやさゆる霜
夜のむげ。延喜の聖代。國土の民どもが。
い。寒くるらんとき。夜のおと。御衣
をぬぐをたすひける事あどもでも。おほくめ
い。わが帝徳の至らぬ事をぞ。御歎きありけ

近江、
深ルハ
ミテ物
九、十
前、テ
或ハ山
ト、ハ
ト、ハ
ト、ハ

つやく
ヨキ目
今ニ即
程善ク
ナリ

書ス而シテ

菊人草字ハ

改ニ遠ニ誤

リタルヤルベシ

まをこ

まをこ

相通じ用ユ

のぼんを福

山近

女房ハ女官の

如し

深更ニ及で程遠く人のさけぶ聲あけり供奉

のちとぐハいさくもつけとまハ主上ハまきハいめ

いで只今叫ぶハ何者ぞあせ見て参せと仰せけ

せむハ人ハぶハあハるハ殿上人上日ハの者ハ仰せて

尋ぬハせハバハ城ハつハトハよハあハやハりのハめハのハてハもハのハ長持ハの

あハさハげハたるハがハあハくハふハくハぞハありハたるハいハあハよハと

問ハへハバハ主ハのハ女房ハ此ハ院ハのハ御所ハ候ハもハせハ給ハふハがハこ

のハ不ハどハ漸ハおハしてハたハるハをハつハるハきハぬハとハ持ハちハてハ参ハる

わハどハふハたハ今ハ男ハのハ二ハ三ハ人ハまハうハでハまハてハ奪ハひハとり

てまのりぬるぞや今ハ御装束のあををこそ御

所を候もせ給らぬまはあぐく立宿らせ

給ふべき親し御方もまよささずこをを思ひ

づぐらるまハあハくハなりハとハぞハいハひハらハるハさハくハかハのハ女

童を具して参りよハのハようハ奏聞ハたりハれハバ

主上ハさハあハいハめハくハあるハむハさんハ何者ハのハ志ハをハさハみ

てハッハあるハらんハとハくハ龍顔ハよりハ御涙ハをハ流ハさせハたま

ふぞ忝ハきハ堯ハのハ代ハ此ハ民ハハハ堯ハのハ心ハ乃ハをハ不ハなるハ御

哉をて心とせむ故ハ皆ををあり今ハのハ代ハ此ハ民

○和文讀本卷ニ

下

御

引ハへハおハし
殿上ハニハ宿直
るハあハし
殿上人
全体四位以上
人ハニハアハサハシハハハ家
殿ハヲハ許ハサハルハ
故ハニハ四位ハ以上ハ
人ハヲハ殿上ハ人ハトハ云
フハナハリハ然ハレハシハト
ソハレハカハラハレハテハ遂
ニハ四位ハノハ人ハヲハ殿
上人ハトハ云ハフハニハ至ハシ

宿直
當直
不体裁粗手女
童
蓋
披
裁
衣
精
米

あな
嘆息の辞
さつ

むさん
漢語

て朕が心を以て心とするゆゑふのさすき
の朝ふありと罪を犯をこをわがをぢまあを
やとぞ仰せとをりるさうめても取らせつとん
衣ハ何色ぞと仰せけむバあつぐの色と奏建
禮門院其のとたをいまご中宮よて渡らせま
ふ時あり其北御方へさやうの色たたる御衣や
候ふと御たづねありけむを先のよけをる
お色い川くーきり参りつるをくさんめめ
わともおぞ給をせらるいまご夜深しまごさ

殿上人
三位以上人ハ
公卿トシテ位
ノ人ハ只結仕
出スナリ之レハ
位ノ善キガ爲
ヲ許サレタルニ
五位ノ人ノ善
主トシテ殿
六位以上ハ比
昇殿ヲ許サレ
改ニ殿上人ナリ

る目おもぞあふとく上日の者をあまごつけ
て主の女房の局までおくとせましくけるぞ
かたづけあきさむバあやしの男賤の女おい
ふるやうとあふ北君千秋萬歳北寶算とぞい
のまける

行成卿實方中將お冠おとされ給ひ
非が只殿こと十訓抄
上人トシテ殿然レドモ全体
大納言行成卿いまご殿上人おてあふなる時

どのゆり
殿中或は
園等ノ掃
除ヲヨシモ

とくけし
散ケル

實方中將いゝなる憤りありらん殿上は参りお
ひていふ事もなく行成の冠をうちあはして小
庭をなげきしてけり行成をあしもささぶらひし
てとのをり司をめて冠とりて参せんとく冠
て守刀よりあうがいぬきとりて鬢をいつくろ
ひく居直りていゝなる事お候ふやらん怒り
かうほどの亂冠を預るべき事こそ覺え侍らね
其の故を承りて後の事おや侍るおらん
とくもむくいとをけり實方の志をけてみげ

はじとみ
サ節ニブチヨウ
ノ如し
のみにしき
實なき者なり

歌枕とハ古
より歌よ
ありたる名
所のことあり
ザリシカ
田ハガリシ
ニ言ナリ

あたり折しもはととまより主上御覽して行成
はいもどき者ありうゝあはれ心あはんとこそ
思わざりしとてそのたび藏人頭あきたりけ
るゆ多くの人を越えそなたをさしおける實方をた
中將をめて歌枕見て参せんとく陸奥國おなが
しつのもさされたるやがてかこよてうせみけ
と

三條内大臣殿のよと 十訓抄

不知作者

三條内大臣殿
ハ大相國實行
公の御子ハ教
公あり

三條内大臣御をとよまらうとよらうぞ來たりけ
る。隣ハ公重少將の居らむたりなるが。この殿
さむらひと物をいひあづりて。大つぶとよてう
侍 ちける。傍の格子をいとおびたゞしくうちさり
りむバ。客人けしきあをえける。お人をめりて。た
ぐらつぞと問をせ給ひりれば。隣の少將の。をの
あき事をとゞめくら候ふと申し。なまばらち
あまら。客人中内へ入らせ給へ。あやまちもど出
くる。と。我も引入り給ひり。又後よりあづり

上臈ハ
シヨウラウト
訓ス

ければ。か木こくを。とをのりうちいひ。是いあ
おとよとのめも。給む。物語して。あをせ。上臈
ハ。このこ。そあるべけ。と。いみづくあり。が。か
ま。し。く。なり。と。其の客人の。たまひ。なる。と。あり。今
の。せ。ハ。不覺。ふ。あ。を。する。と。や。を。し。り。聞。え。ま。し。
此の殿ハ。むげ。道心の。あ。を。し。なる。と。あ。や。京。極。
大納言雅俊卿の。い。み。づく。腹。あ。く。て。い。つ。と。あ。
く。齒。を。く。ひ。つ。め。く。い。り。く。あ。を。し。なる。ふ。ハ。似
給。を。ぎ。り。なる。人。あり。

古今著聞集

橘成季

武則公助といふ隨身父子ありけり。右近のうま
をの北^馬にゆき。日ろく仕りたるごとく。子公助をた
ま^賭ある所あそぶちなるを。ふげのく事もあきて
うたせられバ。みま人いしあおふげましくかくハ
うらまぞとひひけきを。ましおげ候ひあバ。衰老
の父^ハ追^ハまんとせんちどみ。たふせなごし侍らバ。
きまそあそ不便あるぬを。まきバ。あくのござく心

のゆくをどうとらるなり。と申したまは。世の人
い^満みどた孝子ありといひき。世のおをえこれよ
りぞいぞきよらる

小松内大臣殿賀茂祭見の事 十訓抄

不知作者

小松内府賀茂祭見んとく。車四五輛むりよて。
一條の大路ぬいでたまへり。物見車ハ。みまたて
あそべて。まきまもよたよし。いのある車^ハのけとせん
ぞとんと。人々目をまきましくする小。ある便宜^{祭ラ}の所

為兼卿中納言
ありし時永仁
六年隠謀のよ
一聞えて北條
家よりとら
せて佐渡へ流
させ給ひし事
あり

ト部兼好

なる車ども城引出し々々を見せばみか人も
らぬ車どもあり々々。みか見所をとりて人を
煩むさじ下のたぬみ。みか車を五輛たてあつきた
りけるあり。其の頃の内府北き空とみそハいこのあ
る車あるとも。あつとひがら〜こそ有りけりど
も。六條の御息所のあるきたぬ〜も。よくなくや
あぢえさすひけん。さやう此心むせ。あさけあ
し情

日野資朝卿の末と 徒然草

為兼大納言入道め〜とととと。武士どもうち圍
こく。六波羅へぬきゆた々。資朝卿一條日
りみてこそを見て。あちうとやま〜。世はあらん
ねをひいど〜。あそあま〜。はととと。い
れらる。あの人。東寺の門は雨やとりせととと。
らる。あつたををのどと。此集り居たるが。手もあ
しも。ねぢゆのみうちうへり〜。いづくも不具不具人は
あぢやうあるを見て。とり〜。またぐひあきとせ異

者あり。尤愛する小足まりとあをひく。おひりた
すひらる布どぬ。やぶく其の興のきく。見よく
いぶせくおぶえけせむ。只すあやめけし。か
らぬ汚まのあを志のどとあひく。歸りてのちこ
の間裁木を好む。異やう小曲折あを求めて。
目をよふあをしめつるを。あのかうを愛する
あり。うま。と興なくおほえければ。鉢よりあを
は。木は。皆ありす。くらむあ。は。もありぬ
あまあまこことあり」

六平朝
一箇上
一箇下
一箇中

安養尼盗小衣とせし事 古今著聞集

橋成季

横川の恵心僧都の妹安養元の尼比とふ。強盗入
りひらる物ともえあとりていせよはせむ。あま
うへハ紙ぶままといふ物をうりを引き著て居
らむたりらるよ。姉なり尼のをとふ。小尼君とく
ありけるが。さしりまゐるまゝ見けむ。小袖をひ
とつとりた。さしたりらる幾とり。これせぬを
人どりおどし侍りらる。奉るとてもあて來たり

けきバ尼うへのいもきなるコハもとりての
ちハわが物とこそ思ひつゝぬしの心ゆるこ
ばらんりのきバ心きなる盗人ハいせごと
わくハよもゆのど心をちてわを行まし
とせたすへとありなむバ門のこへ入り
いでい心とよびうへし心れをおとさむわ
りもたしこの奉らんといひけむぬきむとど
も立とまり心ちむしあん心たむけむわあてあ
しく参りまけり心とむ心たむ物むり心もさな悪

のら返しねきくかへりあなるとあ心
松平 松下禪尼明障子を繕ふあと 徒然草
ト部兼好

相摸守時頼の母ハ松下禪尼とぞ申しなる守を
いせ申さる心あ心ありなる心あ心けたるあ心
る心ゆ心う心じ心のやふむむをのりをさ心りま心る心
ちむむ心なれバせう心との城介義景その日のけい
めいして候ひなるが給心り心な心ふ心り心男子を
らせ候心ちん心さ心ゆ心り心此事心は心得たる者心は候ふ心

申され々出バ。そ此男^ハ尼ガ細工^ハよもまさり侍
らトとく。なる一^下間づ。ちとせらるを。義景^ハ皆を
はるの候^ハちん^下を。遙^ハおたやき^ハ候ふへ。ま
ら^ハ候ふも見苦しく。や^ハ候^下と重ねて申させけれを。
尼も後い^ハさむくとちりあへんとおをへともけ
^{潔清}ふをのり^ハい^ハさとしのくもあも^ハ魚^ハあり。物ハ
ふをたる所をのをを修理し。用お多事と。若
き人^ハ見^ハな^ハむをせと。心づけむとあきりと申さ
せむ。い^ハもあ^ハむのさかり^ハむを。世を治むる道ハ

儉約を本とし。女性あせとも。聖人此心をかたへ

り
下略

才藝

堀河院、天皇の神樂を多近方^ハ傳させ

給ひし事 體源抄

豊原統秋

多^ハ近方^ハ資忠^ハ小^ハ幼くておくれ^ハけむ^ハバ。神樂の
道ハ傳へざりけるを。堀川院^ハ資忠^ハが手より。めで

とく傳へしめたりとを。近方を尋召して。召人
の中よこの道絶なバ口をしつるべしとて。近方
ををく。近衛の陣子候とせと。萩の戸北邊小近
くめし。御自ぞ教へ給ひける。但御口うりし
物をを仰らせんと。師時卿も傳へ仰らせん
れば。彼の卿も聲ぞりるかりけしども。此の道此
博士もハなりもなり。おのづから師時候ハざり
ける時ハ。近方がうりしと。若^若き限ハ幾びも
うたひてぞ。せねと。せねと。せねと。よくなりぬ

と思召したる時ハ。物をバ仰らせしと。御歌を
とめさせあらしめしけり。三年までよるひる
近く候ひたる。御口うりし物をバ一度も仰
らせしり。古體ありり。や又くひ物あり
々せバ。おのづから師時卿なんどの。た^懐り^欲め
飯をいせと。たびうりしを。せ^懐張^欲僅^欲はあめづ
きてぞ。二三日もせしける。かくし。十六歳
おありてぞ。始めて内侍所の御神樂は柏子と
た^懐り^欲せ^懐バ。め^懐ぐ^懐く^懐て。み^懐の^懐と^懐より^懐始^懐て。ほ^懐め^懐さ

世を^しま^しけ^る神樂の曲ハ^とで^し絶えぬべ
ありけることを^みつ^つの御口より給ひ^らる^るあ
でた^らる^るける事あり

後醍醐天皇の九宮此御歌 太平記

北小路玄慧等作

第九宮ハ^いま^ご御幼稚^おあ^なし^ませ^ばと^て中
御門中納言宣明^あは^り預^めら^る都の内^に御座
有りける此の宮^とく^くハ^八歳^おな^もせ^給ひ^け
る^が常の人^{より}も^御心^ざま^さあ^らは^しく^たら^し

ま^しら^る常ハ^主上^既に^人も^通を^ぬ隱岐國と
やらん^は流^させ^給ふ^上ハ^我ら^とり^都の内^に留
りても何^うせん^哀我^{をも}君^の御座^{ある}なる^國
のあ^らう^へ流^し遣^せら^る責^めて^をよ^そな^がら
も^御行^末を^うけ^たま^らん^りど^かき^くと^きり
あ^らま^し御^涙を^もせ^きあ^へん^はさ^ても^君の
押籠^めら^まて^御座^{ある}白^川を^京近^き所^とき
く^み宣^明あ^ど我^を具^足して^御所^へハ^參ら^ぬど
と^仰あり^らる^バ宣^明卿^涙を^押入^る皇^居程^近き

所_レあてだ_レ候_レも_レ御供仕りて參せん事仔細あ
 るま_レど_レく候ふ_レ。白川と申し候ふ_下ハ都より數百
 里をへて下る道_レ候ふ_レ。さ_レも_レバ能因法師_レが都
 を_レバ霞と共_レ出_レし_レあ_レど秋風ぞ_レふ_レく白川の關と
 よみて候ひ_レ歌_レめて道の遠き程人を通さぬ關
 ありと_レえ_レね_レお_レし_レめ_レし_レあ_レせ給へ_レと申さ_レせ_レた_レれ
 ば宮御涙を押へさせ給ひて暫_レハ仰出さる_レ事
 もな_レし_レや_レ有りてさてハ宣明我を具足_レし_レ參
 ら_レトと思へ_レる故_レに_レか_レゆ_レみ申_レは_レそのあり_白

かくりハ四本
 懸て_レ鞍場_レ
 本_レを_レ裁_レる_レ事
 あり_レ裁_レる_レ事
 故_レ實_レあり_レて_レ此
 柳_レ長_レの_レ櫻_レ
 裁_レる_レ事_レあり

の關とよみ_レる_レハ_{トコ}全く洛陽渭水の白川_レハ
 非_レ也此の關奥州の名所あり近_レご_レる津守國夏_レが
 是を本歌_レみ_レる_レよ_レと_レなり_レし_レう_レら_レる_レ東路の關_レまで
 ゆ_レら_レぬ白川も日數へぬ_レむ_レむ_レ秋風ぞ_レふ_レく又最勝
 寺の_レか_レり_レの櫻_レ枯_レむ_レる_レし_レを_レ裁_レる_レ替_レる_レと_レて_レ藤
 原雅經朝臣_レあ_レあ_レて_レ見_レし_レむ_レ名_レ殘_レの_レ春_レど_レとも_レあ
 白_レと_レあ_レる_レ川_レ此_レ花_レの下_レ蔭_レ是_レ皆_レ名_レハ_レ同_レと_レく_レして_レ所_レハ
 替_レる_レ證_レ歌_レなり_レよ_レし_レや_レ今_レハ_レ心_レみ_レあ_レめ_レと_レ言_レ出_レさ
 くと宣明を恨仰_レら_レを_レ其_レの後_レより_レハ_レか_レきた_レえ_レ戀

一とぞお仰せらるるに、よろし物うた御氣色もて、
 中門おたくせ給へる折なり、遠寺の晚鐘、幽は間
 えけむらば、
 つくぐと、思暮しく、入相の鐘をきくも、君ぞ
 戀した情内は動きとく、ことを外に顯せ、御歌のを
 みる、哀に聞えしるば、其の比京中の僧俗男
 女、是をた、うろ、扇紙をかき附て、是こそ、八歳珍の
 宮の御歌よとく、翫むぬ人、ハナクをけり、
 源義家朝臣の江帥小物學びしと、古今

著聞集

橘 成 季

義家朝臣十二年の合戦の後、宇治殿へまゐりて、
 戦の間此物語しるるを、匡房卿より、くまると器
 量をか、こゝれ武者をせど、なる軍の道を、志
 らぬと、ひとりごと、みいをも、を、義家の郎等
 き、て、異けやけき、とをの、さす、ふ人かな、と、ねを
 ひ、うり、なる、さる、ねど、江帥出らせ、らる、ふ、や、が
 て、義家もい、く、ける、子、郎等、か、くる、と、城、この、の

十二年云々
陸奥の戦あり
宇治殿ハ開白
頼通公なり

江帥とハ大江
匡房卿大宰権
帥なるを
敵小寺を

孫子の無敵者
代也といふこと
と見せしむる

たもひつを^レと^レう^レり^レた^レを^レた^レさ^レを^レめ^レや^レう^レあら
んといひく^レ車^レの^レを^レける^レ所^レへ^レも^レみ^レあ^レま^レて
會^レ釋^レせ^レも^レせ^レり^レや^レく^レ弟^レ子^レは^レあ^レり^レて^レを^レせ^レよう^レ
常^レは^レま^レう^レで^レ學^レ問^レせ^レも^レせ^レり^レその後永保の^レ
せん^レの^レと^レを^レ金澤の^レ城^レを^レせ^レめ^レり^レま^レひ^レと^レの^レ此^レ
雁^レと^レび^レう^レり^レく^レ折^レ田^レ北^レ面^レに^レあり^レんと^レ志^レ々^レる^レが^レ俄^レ
驚^レき^レて^レつ^レら^レを^レみ^レづ^レり^レく^レ飛^レ歸^レせ^レけ^レる^レを^レ將^レ軍^レ
あ^レや^レし^レく^レく^レつ^レむ^レを^レね^レら^レん^レく^レ先^レ年^レ江^レ帥^レの^レ
一^レへ^レ給^レへ^レる^レ事^レあり^レ夫^レ軍^レ野^レは^レふ^レも^レ時^レハ^レ飛^レ雁^レつ^レ
行 伏

城^レや^レぬ^レる^レあ^レの^レ野^レは^レ必^レ敵^レふ^レた^レる^レべ^レし^レう^レと^レめ^レて
を^レま^レを^レは^レび^レき^レよ^レし^レ下^レ知^レせ^レも^レる^レは^レ手^レを^レ分^レち^レて
三^レ方^レを^レま^レく^レ時^レあ^レん^レの^レど^レく^レ三^レ百^レ餘^レ騎^レを^レう^レく^レ
あ^レた^レら^レり^レた^レる^レ兩^レ陣^レ亂^レ合^レひ^レて^レ戰^レふ^レこ^レと^レ限^レあ^レし^レさ
を^レど^レも^レあ^レぬ^レて^レさ^レら^レり^レぬ^レる^レあ^レと^レあ^レま^レは^レ將^レ軍^レの^レ軍
か^レち^レあ^レり^レて^レ武^レ衡^レ等^レが^レ軍^レや^レぶ^レを^レふ^レら^レり^レ江^レ帥^レの^レ
一^レ言^レあ^レの^レと^レま^レし^レの^レが^レあ^レぶ^レな^レう^レら^レま^レし^レと^レぞ^レい^レと
せ^レり^レ

經信卿三舟に乗らむと
十訓抄

白川ハ京の西
多ク大井川の
名あり

不知作者

白川院西川は行幸の時詩歌管絃の二の舟を浮
べてそのまじりのひとくを分けてのせしむる
ふ。經信卿選參の間あとの布衣御けしを
あけりりるわどふとまじりのまじり参りおまけ
るが。三事兼ねらる人あまごまじりまじりま
てや。どの舟はあれよせ候へといをまじりけ
る時まじりまじりまじりまじりまじり料
選參せしむるまじりまじり管絃の舟まじり

詩歌を獻せしむるまじり。三の舟まじりとは是

なり

賴政三位の才能比ふと

十訓抄

不知作者

高倉院の御時御殿のうへは鶴のなきけるを
しきことあるとく。いづれまじりまじりまじり
て有けるを。ある人賴政まじりまじりまじり
申すまじりまじりまじりまじりまじり
此の由を仰せらるるまじり。かしこまじり
宣旨をう

けたまをうりく。心中おあをひりるハ。ひるだあ。ち
いさ。九鳥あをを得か。さきとモ。サツキ五月の空闊ふあく。
両さへふりく。いふむをのりな。我をせよ弓箭の
冥加つきふりりとねをひく。八幡大菩薩をねん
と奉りく。聲を尋ねて矢をもあつニあうふるやう
おあをえけむ。バ。よりく見るふ。おやまらず中り
ゆるる。天氣よりむづめを。ひとく感歎いふむの
りか。後徳大寺左大臣。そのとと中納言めて。祿
をうけらむるヲリまかくあんヨシ。

ほととぎに名をも雲井。あぐるうた。

頼政とりあへむ。

真弓むり月の射いるままのとき。

とつけたりけるハいみじのりりるまのり出で。

後よ。

昔養由雲外射雁。今頼政雨中得鷓ケリ。

とぞ感ぜらむる。頼政慕目の外征天そやを取り

へして持ちたりなるを。後五人のとひ々むむを

一不覺りきたとバ。申し行ひたり一人をぞ射ん

がためなりとぞこころへける

道風朝臣の書比こと 古今著聞集

橘成季

延喜の聖主醍醐寺を御建立のとき道風朝臣は額書きよめとせよと仰らせと額二枚を給ふをたり一まの南大門一枚西門の料あり真草兩やうありたを奉るべきよし勅定ありけむバ仰よをたがひく兩様をかきてあるとせりたりを真に書きたるハ南大門のせうあるべ

きを草の字比額をむむの門よりたれり道風こそをみとあをれ賢王やとぞ申すその故ハ草のづく殊ふのきをましてあがえけるが叡慮かなひくうく日頃の議あたらまりとせよとせりまあゆのこき御をのりひをたべしそをほめ申をあるべし

齊信卿拍子のこと 十訓抄

不知作者

後一條院の御時清暑堂の御神樂公任卿拍子

第ハ一リテ拍
子セウツ料カ
リ

とるサダむきサダもとあるはるは。期ヲ望ミとく。齊信卿上
臆ヲて上ノ居ラをたりける。小ヲ管ヲ絃ヲ者トてあら
ねバ。定めてよも承伏せどと思ひて。笏ヲをさしや
つて。氣色ヲむりゆづるよしをせとせらるは。辭
せらることとなくく。やうと拍子トととせらる思
もトせトあ人トあくねがえを。始終キく小ノ失カくめ
てテ。事ヲをく。以テよりあノ事ハ御沙汰候ふ
ぞ。といトをせられバ。公ノ事ノの道ヲを候へを。かシ北
ぞとく用意仕まりとぞ答へらせらる。いトとあ

りけ星

經家馬術のふと 古今著聞集

橘 成 季

武藏國の住人都築平太經家も高名の馬乘馬飼
ありけ星。平家の郎等ありけむを。鎌倉右大將め
しとりく。景時小預けとせむなり。そ北時陸奥よ
ま。大きくしとたけき惡馬を奉りたをけるを。い
ふあものる者なりとけり。きふえある馬乗と
ま。面々ものせとせけれとも。初トりもたゆる者

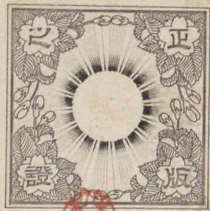
なつりたる幕下思ひらぐらむをさくさるよても
此の馬ののる者なくてやまんごと口惜し物事
ありいづれをどたど景時よひ合せ給ひたるを
バ東八國今ハ心おくき者候とび但召人經家
ぞ候ふと申したるをばさうとバめせとくと則召出さ
きぬ白き水干は葛の袴をぞ著たりける幕下う
る惡馬ありつらうまつりてんやとのさまをせ
けきを經家うみまうて馬ハ心人よのさるべ
き器も候へむいのみたけき人み從もぬ事

や候ふとさきと申しけきを幕下入興せとをけり
ききをつらうまつれとて則馬を引出されぬ誠
は大き小高くさあかりを拂ひくをねまをり
けり經家水干の袖をさる袴のそを高く狭こ
て烏帽子がけして庭おたり立ちさるけしきま
づゆしくぞ見えたるかねる存知たりなるよ
や轡をぞたせうけりその轡ををげとさ
繩とせたりけるを少しも事とせせぬをぬえ
しりたるをさう繩もをがうてたがうよりて乗

りて々々やぶるもつりあがまて出でけるを少
くはくもせく^即ちとを老の^{徐々}の^{サマ}とあゆまを
て幕下の前もむけくたて^{サマ}けり見る者めを
驚きむといふ事な^{「本ノマ」}よくの^{サマ}とせ今ハさやうの
てこそあゆめとの^{サマ}もせける時ありぬ大さ
は感^{サマ}たすひて勤當ゆるさ^{サマ}と^{サマ}既別當はな
きふ^{サマ}り^{サマ}かの^{サマ}經家が馬のひけるハ夜中を^{サマ}あり
は起き^{サマ}く何^{サマ}ふりあるらん白き物を一^{サマ}も^{サマ}け
を^{サマ}つり手づあ^{サマ}り持來て必^{サマ}ひ^{サマ}けり^{サマ}を^{サマ}べてよる

を^{サマ}つり物をくもせく夜明く^{サマ}む^{サマ}バ^{サマ}も^{サマ}は^{サマ}髪をぬ
もせく馬の前もハ草一把もた^{サマ}ら^{サマ}び^{サマ}と^{サマ}と^{サマ}と^{サマ}
うせ^{サマ}くぞありける幕下富士川あ^{サマ}ひ^{サマ}ざ^{サマ}もの狩^{サマ}
出^{サマ}ら^{サマ}き^{サマ}たる時^{サマ}も^{サマ}經家ハ馬七八ひ^{サマ}き^{サマ}は^{サマ}鞍あ^{サマ}きて
手綱^{サマ}む^{サマ}を^{サマ}び^{サマ}く人^{サマ}も^{サマ}つ^{サマ}け^{サマ}ぞ^{サマ}ち^{サマ}放^{サマ}し^{サマ}侍^{サマ}り^{サマ}け^{サマ}を
バ^{サマ}經家^{サマ}が馬の尻^{サマ}も^{サマ}隨^{サマ}ひ^{サマ}て^{サマ}ゆ^{サマ}き^{サマ}け^{サマ}り^{サマ}さ^{サマ}く^{サマ}狩^{サマ}場^{サマ}も
て馬の疲^{サマ}せ^{サマ}たるを^{サマ}り^{サマ}あ^{サマ}ハ^{サマ}召^{サマ}れ^{サマ}従^{サマ}ひ^{サマ}て^{サマ}ぞ^{サマ}參^{サマ}ら^{サマ}を^{サマ}
け^{サマ}る^{サマ}の^{サマ}や^{サマ}り^{サマ}傳^{サマ}へ^{サマ}る^{サマ}者^{サマ}あ^{サマ}り^{サマ}經家^{サマ}の^{サマ}ふ^{サマ}り^{サマ}ひ^{サマ}を
く入海^{サマ}して死^{サマ}も^{サマ}た^{サマ}れば^{サマ}知^{サマ}る^{サマ}を^{サマ}の^{サマ}あ^{サマ}り^{サマ}口^{サマ}を^{サマ}し^{サマ}き

明治二十年九月廿六日
文部省檢定濟



發行

編輯
出版



明治十五年十一月十三日板權免許
同 年十二月 出版 定價貳拾錢
同 十八年八月十八日再版御届

埼玉縣士族

稻垣千頼

東京下谷區仲徒町二丁目一番地

普及

同下谷區練塀町十四番地

奎文堂

同日本橋區吳服町六番地



おとあり
和文讀本卷二
...

広島大学図書

0130449325

